福岡市早良区

重留A群第1号墳

財團法人　古代學協會

昭和59年

例　言

1. 本書は，昭和58年に(財)古代學協會が北西産業株式会社の委託を受けて実施した福岡市早良区大字重留字後谷456に所在する重留Ａ群第１号墳の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は下條信行，定森秀夫，藤尾慎一郎が分担し，各項の末尾に執筆者を明記した。
3. 遺構の実測は藤尾，定森が，遺物の実測は柴田悟，川西弘一，岩元雅毅，定森が行い，製図は堀千寿子，柴田，定森が行った。遺構・遺物の撮影は定森が行った。
4. 本書では第１・２図は真北，その他は磁北を使用した。図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。
5. 編集は下條の指導のもとに定森が行った。なお，当館の川西宏幸から種々の教示を受けた。

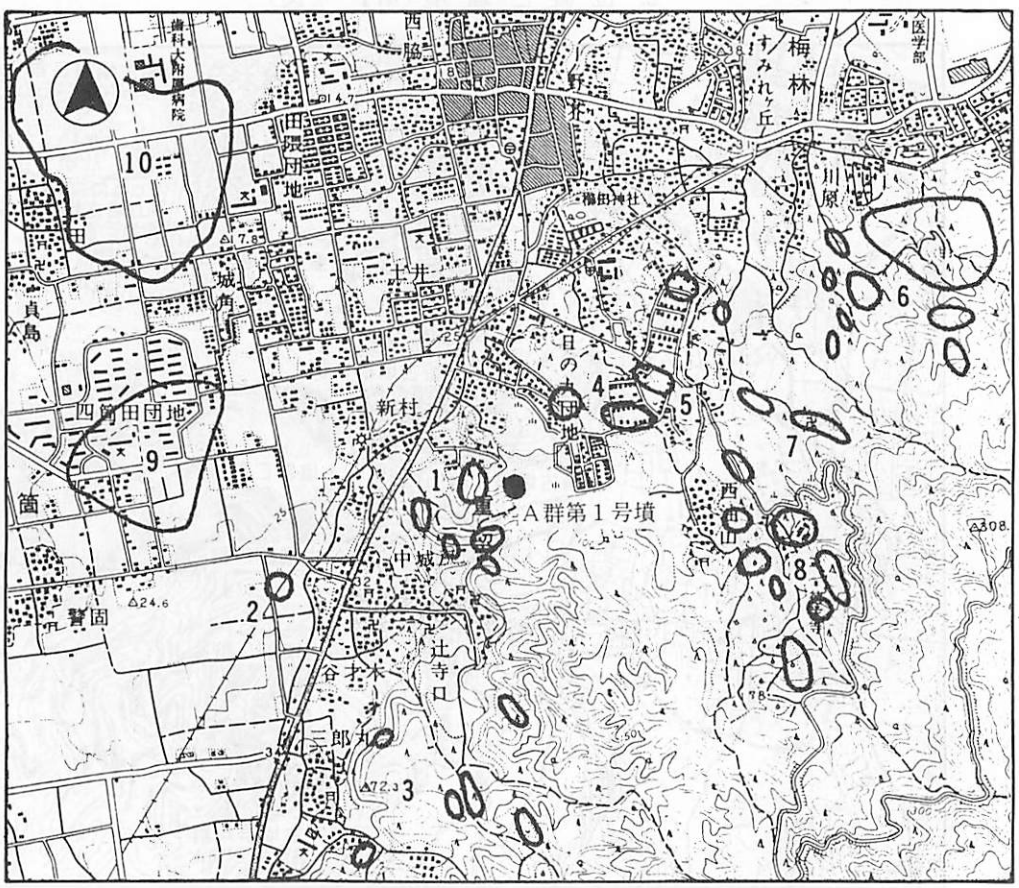
Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過と調査組織

昭和58年10月中旬，福岡市教育委員会文化課折尾学係長より，当平安博物館に遺跡調査の受託についての打診があった。遺跡は福岡市早良区大字重留に所在する円墳1基で，それが北西産業株式会社の宅地造成地内の道路建設にかかり潰滅するので，事前調査を要請されたものであった。

同年10月24日，下條は折尾係長，北西産業谷貞章課長ともども現地視察を行い，三者あい計って円墳1基とこれに連接する墳裾らしき高まり(もし古墳であったとしても，古墳の主要部はすでに削除され，墳端の一部を残すだけである)の調査を行うとの結論に達した。

古墳は丘陵の斜面に造られ，完存の1基は直径約12m，高さは東側で約0.5m，西側で約2.5m



第1図　重留古墳群周辺遺跡分布図(縮尺1／25,000，註1の文献より作成)

1．重留古墳群，2．拝塚，3．三郎丸古墳群，4．山崎古墳群，5．影塚古墳群，6．駄ケ原古墳群，7．霧ケ滝古墳群，8．西油山古墳群，9．四箇遺跡，10．田村遺跡群

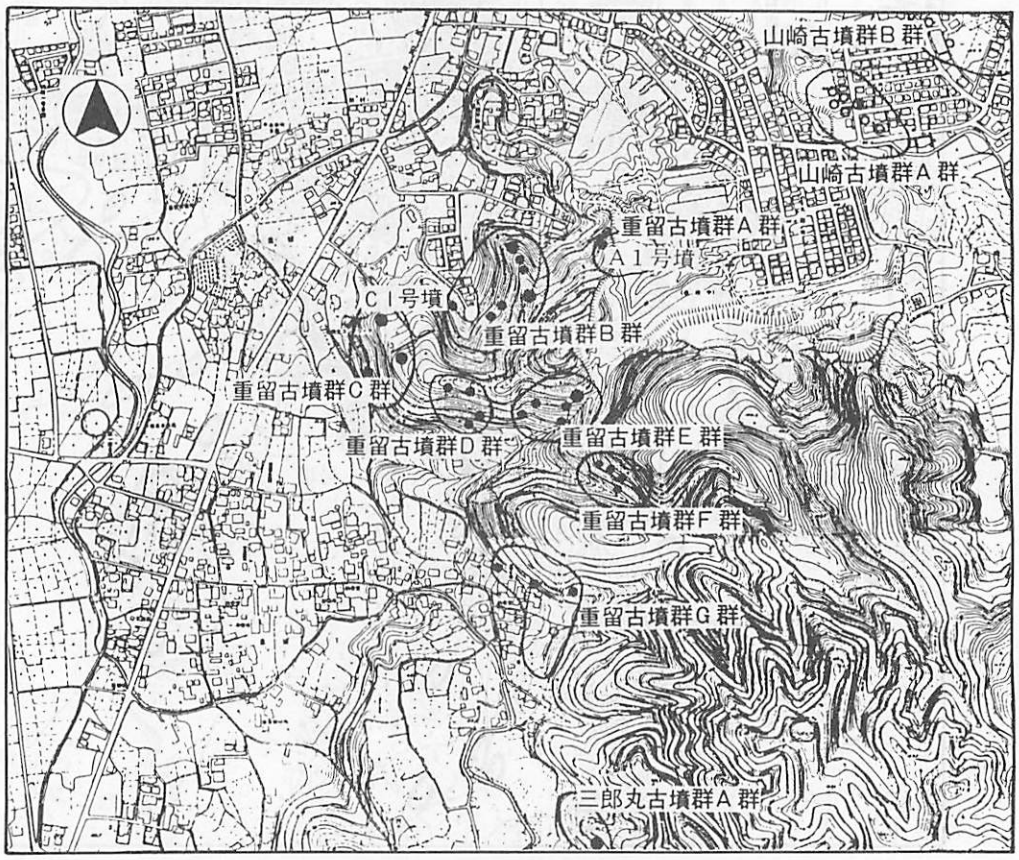
を測り，墳頂は陥没し石室の上部は露出していて，石室の状態から横穴式石室の玄室部であることが推定できた。奥壁は丘陵の高位(東)にあるので，丘陵の傾斜に沿って石室が造られていることが推測できた。

同年11月17日に折尾係長が来館され，依託発掘の契約を取り交した。これに基づき，平安博物館調査部は同年11月28日～12月24日の約１ケ月間，現地において発掘を行い，無事調査を完了した。

調査は平安博物館調査部定森秀夫を調査主任とし，下條信行(調査部長)が統括し，藤尾慎一郎(九州大学大学院博士課程)がその補助を行った。

調査に当っては，福岡市教育委員会の生田征生課長，折尾学係長，柳田純孝係長，浜石哲也，田中寿夫，山崎龍雄，山崎純男，山口譲治，北西産業の諸氏，諸機関には直接の援助を受けた。また，九州大学の岡崎敬，横山浩一，西谷正，田崎博之，福岡県教育委員会の柳田康雄，伊崎俊秋の諸先生にも一方ならぬお世話を頂いた。(下條信行)

2. 位置と環境(第1・2図)

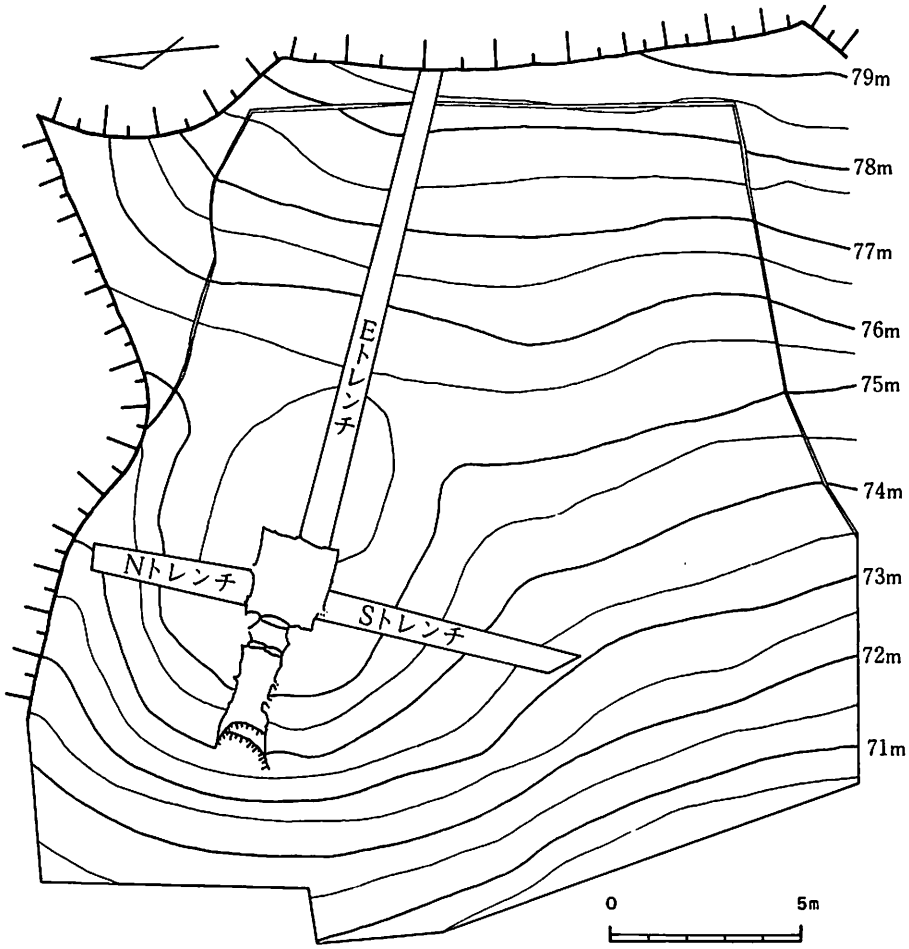


第2図　重留古墳群周辺地形図
(縮尺1／10,000，註1の文献より作成，A1号墳は実際には註1の文献の位置より北西にややずれていたので修正)

重留A1号墳は早良平野の奥，油山西麓の福岡市早良区大字重留字後谷456に所在する。昭和57年，福岡市教育委員会によって発掘調査されたC1号墳[1]は，本墳の西方約300mに位置している。

周辺の遺跡については，C1号墳の報告書に記述されているが，簡略に再述すれば，本墳の西方の平野部には縄文時代前期～古墳時代の集落跡である四箇遺跡[2]，その北には弥生時代～中世の集落跡である田村遺跡群[3]が所在している。そして，古墳時代には拝塚が築かれ，さらに古墳時代後期に入っては，この油山西麓に多くの群集墳が築かれている。重留古墳群の南方には三郎丸古墳群，北方には山崎古墳群，影塚古墳群[4]，東方には北より駄ケ原古墳群[5]，霧ケ滝古墳群，西油山古墳群が，それぞれ尾根を別にして所在している。

今回の発掘調査はC1号墳の発掘調査に次ぐものであり，C1号墳と共に重留古墳群の性格究明に資するものと思われる。（定森秀夫）



第3図　墳丘測量図

Ⅱ. 調 査 の 記 録

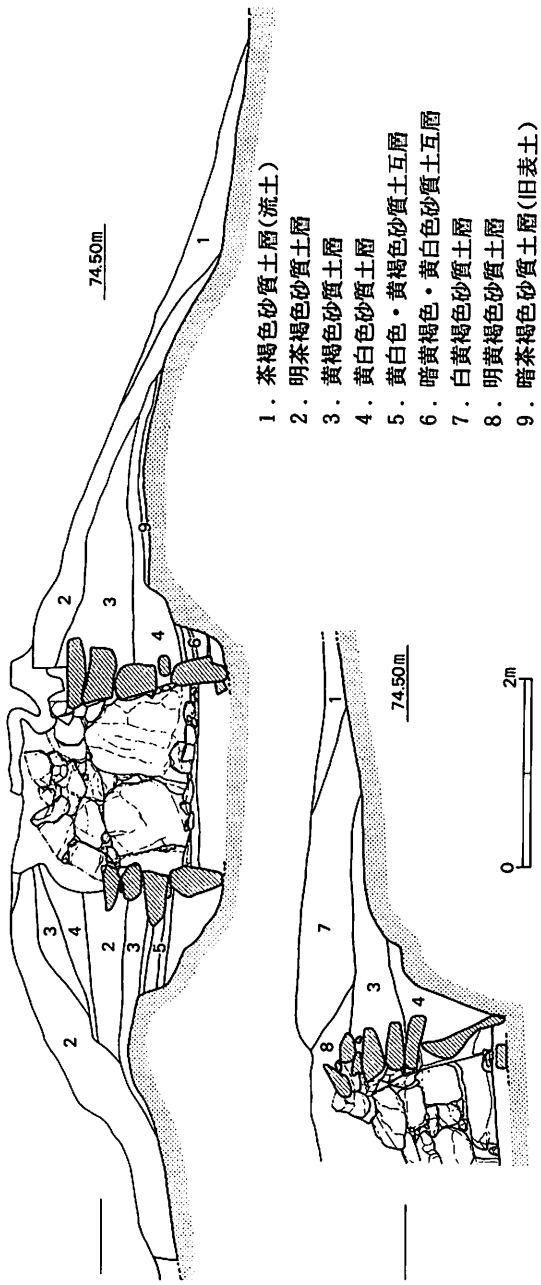
1. 墳　丘（第３・４図，図版第１）

本墳は標高73～75mに立地し，現墳頂高は標高75.6mである。墳丘の現高は東側で約0.5m，西側で約2.5mを測る。現状の直径をＳトレンチ断面図をもとに復原すると11.4mとなるが，封土の流出等を考慮に入れれば，本墳の直径はもともと12m前後であったと推定される。

石室掘方は，地山の黄褐色・黄白色花崗岩バイラン土を，南北方向には幅４mほどでやや斜に２段に掘り込み，東側もやや斜に２段掘りしている。この掘方は，石室スペースぎりぎりのＣ１号墳の掘方とは異なる。

このように地山を掘り込んだ後，石室を構築しているが，右壁では腰石，左壁では腰石と２段目の石まで版築手法で固めていて，奥壁では掘方ぎりぎりに石を置いているが，版築は行われていない。その後，地山土を混えた土を盛っているが，各トレンチ断面図はそれぞれ異なった盛土を示している。Ｓトレンチでは旧表土と思われる土層を確認したが，Ｎ・Ｅトレンチでは確認できなかったので，北側・東側では旧表土はカットされたものと思われる。

また，外護列石の存在と本墳東側に馬蹄状溝の存在も予想された



第４図　墳　丘　断　面　図

が，検出されなかった。

なお，はじめに触れたように本墳の東側斜面にもう1基の古墳が存在する可能性もあったが，石の集中する部分はあるものの，散乱した状態であり，等高線も極端な盛り上がりを示していないので，標高79m以上のすでに削り取られた斜面上に古墳が存在していた可能性もあるということを予想させるのみであった。（定森秀夫）

2. 横穴式石室（第5～7図，図版第2～4）

(1)概　観

本墳の埋葬施設は主軸をN－71°－Wにとり，ほぼ西に向かって開口する単室両袖の横穴式石室である。石室の遺存状況は，天井石の大半と壁体の上部がすでに失われていた。石室はほぼ方形プランを呈する玄室に狭長な羨道が連接する。羨道部玄室寄りに第2梱石を根石とする閉塞施設がみられる。石室遺存長は右壁で5.20m，左壁で5.84mを測る。本墳使用の石材はすべて花崗岩で転石主体である。

(2)玄　室

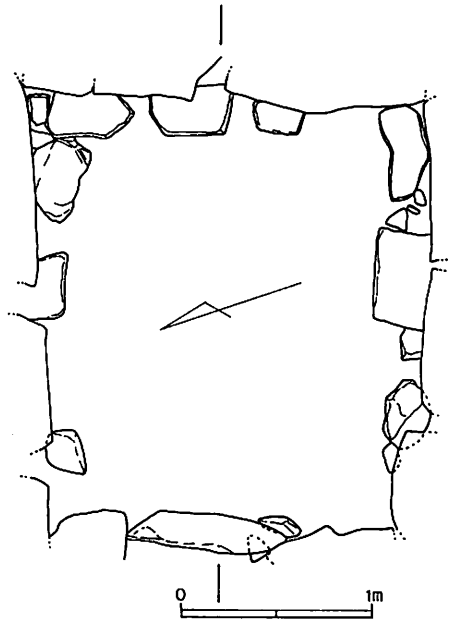
奥壁幅2.1m，前幅1.8m，右壁長2.24m，左壁長2.34mを測り，ほぼ方形の平面プランを呈す。壁体の構築は奥壁と側壁では若干の相違がみられる。

奥壁は高さ120～150cmほどの巨大な石材を3石，縦位置に設置し腰石とし，内側に扁平な割石を根石としてからめて安定を計っている。床面からの高さは0.9～1.2mである。腰石の上位は40～50cmの石材を5段以上横積みするが，目地は通っていない。

両側壁は80～110cmを測る3個の石材を配し腰石とし，やはり根石をからめているが，奥壁側の2石は横位，もう1石は縦位に設置され，統一されている。腰石上部は60～90cmの石材を横積みにし，目地を通す意識が窺える。右壁は内傾し持ち送っているが，奥壁にみられる内方向への傾斜は，奥壁外方（ほぼ東）からの大きな圧力が関連している可能性があり，一概に判断できない。壁体はいずれも間隙が多く，大小の転石による充塡が著しい。

玄門部は素型の両袖で，床面からの高さは右袖0.9m，左袖0.75mで，石材を縦位置に設置する。袖幅は順に0.65，0.4mでわずかに差が認められる。袖石の上位は20～30cmの転石を横積みするが，2段ほどしか確認できない。

床面は敷石と思われる扁平な転石が数個原位置を保っていたが，それ以外に存在したかどう



第5図　玄室根石配置図

かについては確認できなかった。いずれにせよ，根石を設置した後，地山土の黄白色花崗岩バイラン土を固く敷いて，最初の床面としている。

(3)羨　道

最奥部に天井石が1枚遺存するが，その他は崩落しており，また側壁も開口部付近の遺存状態は不良である。現存長は奥幅0.77m，右壁長2.96m，左壁長3.5mで，右壁がややすぼまるほぼ長方形を呈す。壁体の構成は玄室側壁に類似している。

第1梱石の部分で長さ80cmの転石を縦位置に設置することにより腰石とし，他の腰石は30～50cmの転石を横位置に3石使用する。腰石の上部は，最奥の腰石の上部において50～60cmの転石を2段横位に重ねて天井石を架構するが，それより開口部側は20～40cmとやや小ぶりの転石を粗雑に積み，明確な差をみせる。やはり間隙が多く，大小の転石による充塡が著しい。

天井石は4枚である(図版第2左)が，原位置を保つ最奥の天井石は長さ約140cm，厚さ30～55cmで，断面はほぼ三角形を呈し，床面からの高さは1.2mである。なお，玄室奥壁の状況からみて，玄室の天井石は床面から1.5m以上のところに架構されたものと推測でき，その点からみて玄室と羨道の天井石の比高差は0.3m以上と思われる。

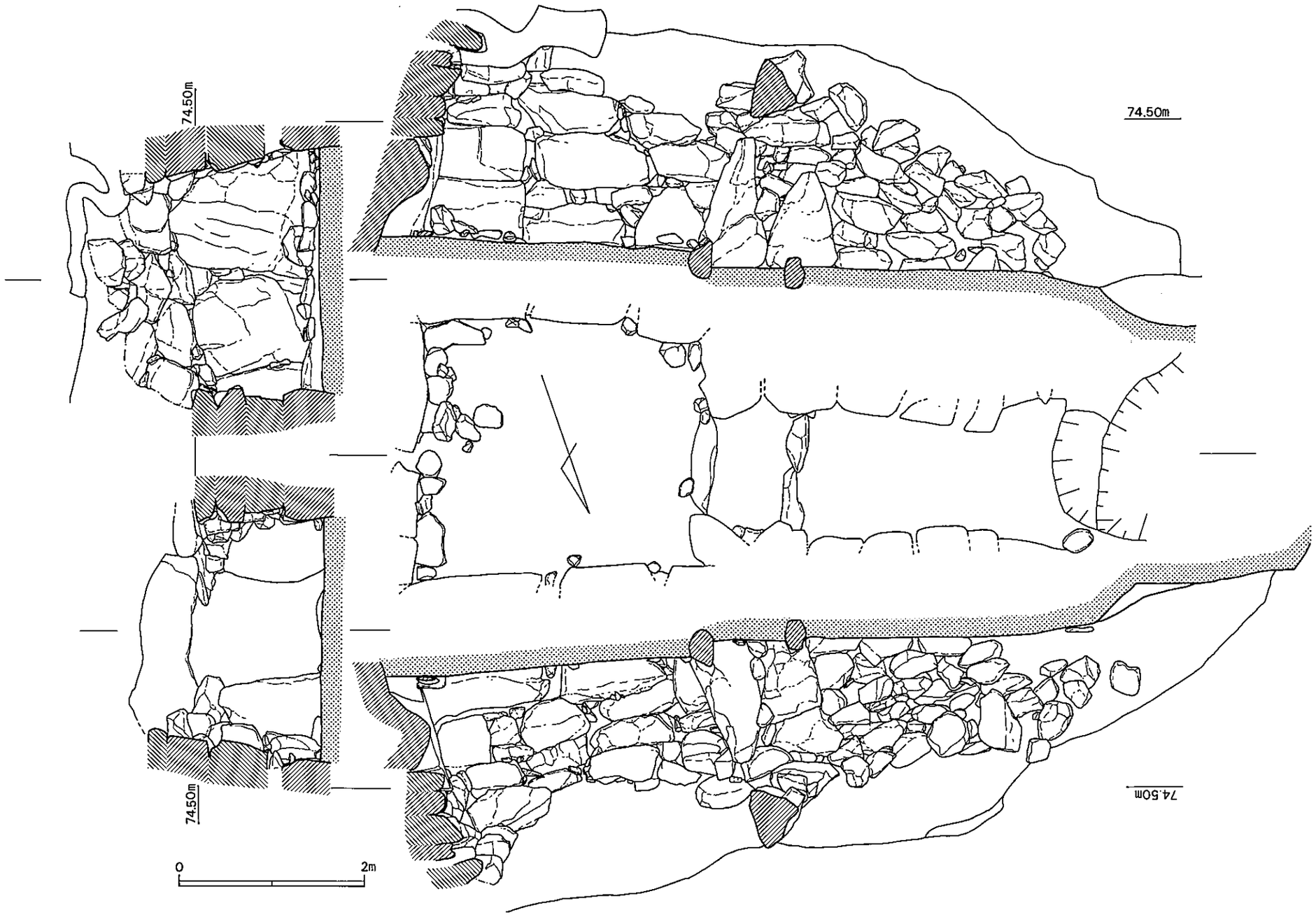
床面には梱石を二重に配置する。第2梱石は玄門間にあり，第1梱石はそれより0.75mほど開口部寄りに位置する。第1梱石は長さ50～55cm，幅10～20cmの転石を2石組み合わせて2石横列とし，やや互交に組み合わせている。第2梱石は長さ85cm，幅20cmを測る転石利用の1石横列である。羨道床面からの高さは順に7cm，20cm，また第2梱石の玄室床面からの高さは8cmで，玄室床面と羨道床面との比高差は約12cmであり，玄室側が高い。玄門から2.84m(中軸線上)までは緩やかに下降する(比高差5cm)が，そこから10cm，31cmと2段にわたって落ちていく。

(4)閉塞施設

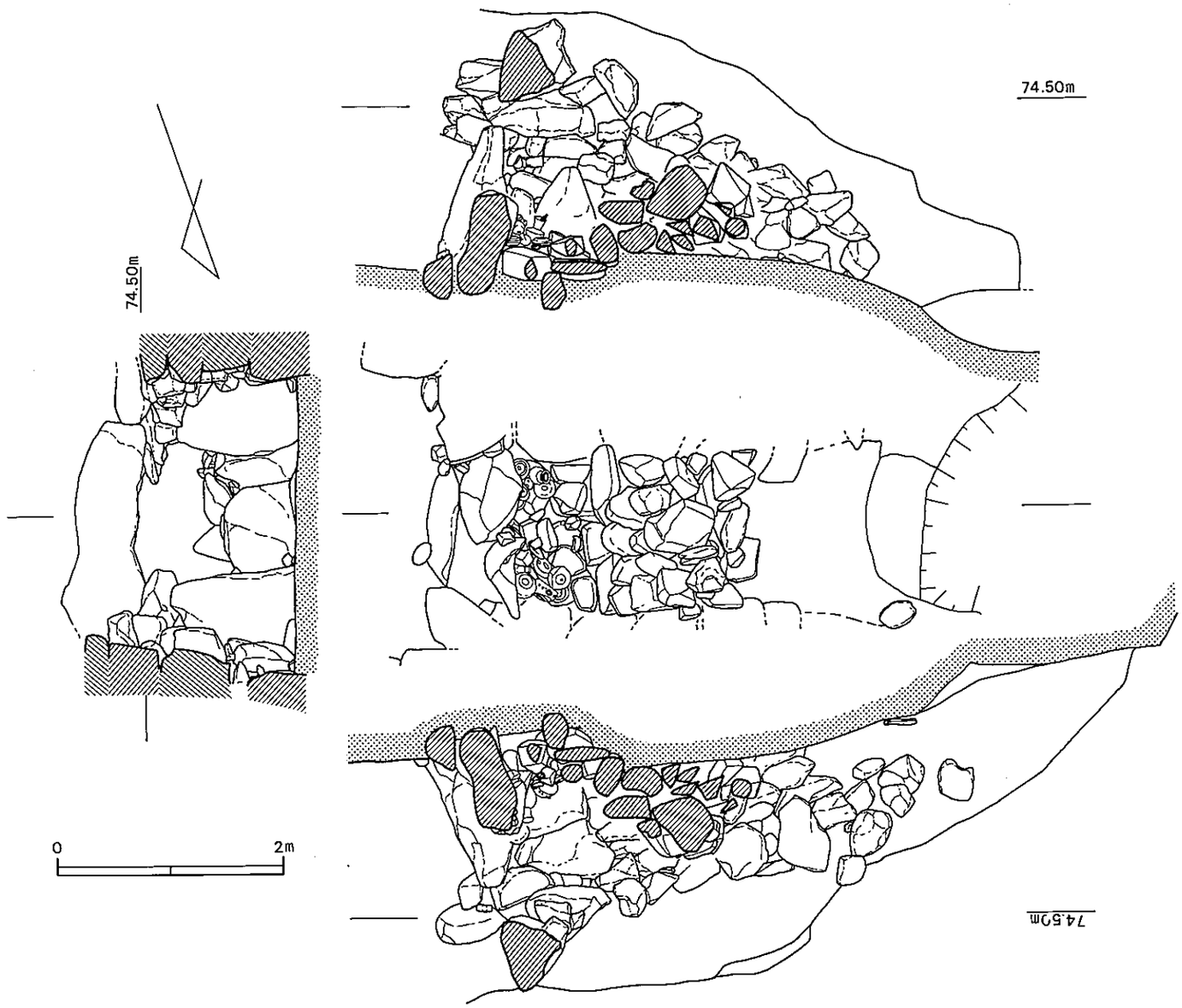
第2梱石の後方に高さ60～70cmの大石を2枚立て，その後方約0.7mまでのスペースに6個の人頭大の石を敷いていて(図版第5上右)，第1梱石はそれら6個のスペースのほぼ中央の下になっている。このうち左壁玄門寄りの石に密着して出土した杯蓋片が玄室埋土出土の破片と接合するので，この部分の閉塞施設は初葬の際につくられたものと考えられる。

追葬時の閉塞施設はこれらを利用し，6個の石の上に更に石を敷き，そこに須恵器を置いている。そして，この後方は羨道床面より約25cmほどの厚さで固く締った黄褐色土がある。この上の玄室寄りのところにまず細長い転石2個を梱石のように配し，この後方の約1.1mのスペースに大小の石を約0.6mほど積み上げているが，玄室寄りの方は人頭大の石を面を揃えて2段ほど積み上げ，後方に行くに従い乱雑な積み方となっている。

このように，追葬時には初葬の際の閉塞施設である2つの大石等を取り除いていなかったようであるが，その際玄門の閉塞石と天井石との間隔は約0.55mあり，人一人は十分通り抜けることが可能であると思われ，また実際に可能であった。(藤尾慎一郎，閉塞施設は定森秀夫)



第6図 石 室 実 測 図



第7図 羨 道 閉 塞 状 況 図

3. 出 土 遺 物

(1)遺物の出土状況(第8図，図版第5)

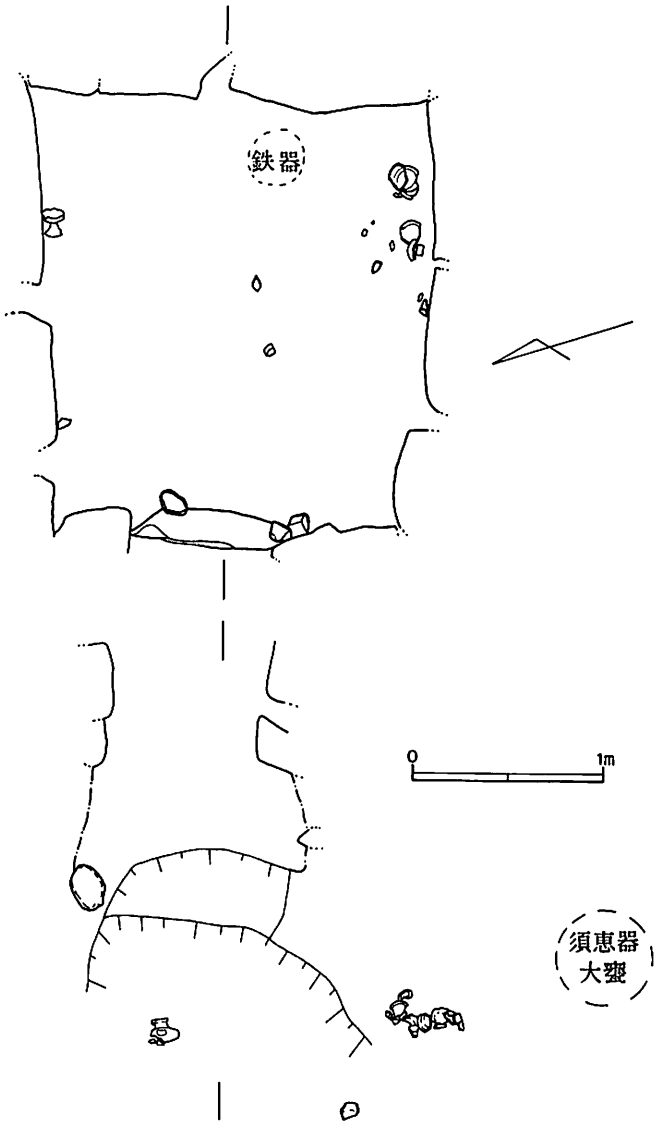
玄室は撹乱を受けていて，墳頂表土出土の破片と接合するものがある。ただ，右壁近くに，床面より浮いた状態で蓋杯がかたまっており，これらの蓋杯が蓋と身を合わせていないこと，前述したように玄室埋土の破片が羨道閉塞部の石の上に密着していた杯蓋片と接合すること(第9図9の杯蓋)から，この出土状態は追葬時に玄室内に“とりまとめ[6]”られた状態を示すものと解される。鉄器類も床面から浮いた状態で，奥壁近くから集中的に出土していて，これらも原位置とは考え難い。

羨道閉塞部(第7図)出土須恵器は追葬時のもので，原位置を保っていた。玄門寄り左右側壁沿いの両側に分けて置かれていた。なお，埋土のふるいから石鏃1点が出土している。

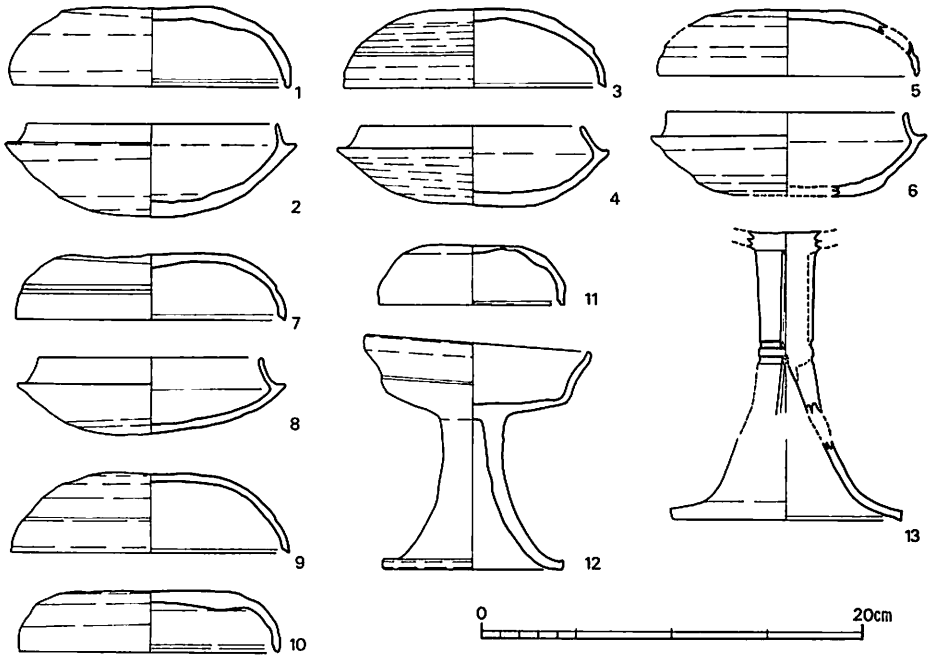
封土中では，墳裾近くの羨道右側及び前庭部と思われるところから土師器高杯が出土した。これらのさらに右側に須恵器大甕が埋められていたが，左側では確認されなかった。

(2)玄室出土遺物(第9・10図，図版第6・7)

須恵器　蓋杯(第9図1～10)　蓋は口径13.4～14.4cm，器高3.3～4.5cmで，口縁端部断面が段をなすものと，内面に1条の沈線を廻らすものがある。また，外面の口縁部と天井部との間に1条の沈線を廻らすものが3例あるが，明瞭な段をなすものはない。天井部中央以上はヘラ削り。身は口径11.6～13.0cm，器高



第8図　遺物出土状況図(上：玄室，下：羨道横封土)



第９図　玄室出土遺物実測図（１）

4.2～5.0cmで，やや深いものが多く，底部はヘラ削り。

蓋（第９図11）　口径10.0cm，器高3.2cmで，口縁端内面に１条の沈線を廻らし，天井部は静止ヘラ削り。短頸壷の蓋と思われる。

無蓋高杯（第９図12）　口径12.1cm，器高12.0cmで，杯部外面底部寄りのところに１条の沈線を廻らし，口縁部はたちあがる。

高杯脚片（第９図13）　復原脚高14.2cmで，透孔は上下とも２孔であり，上段の１個は貫通していない。

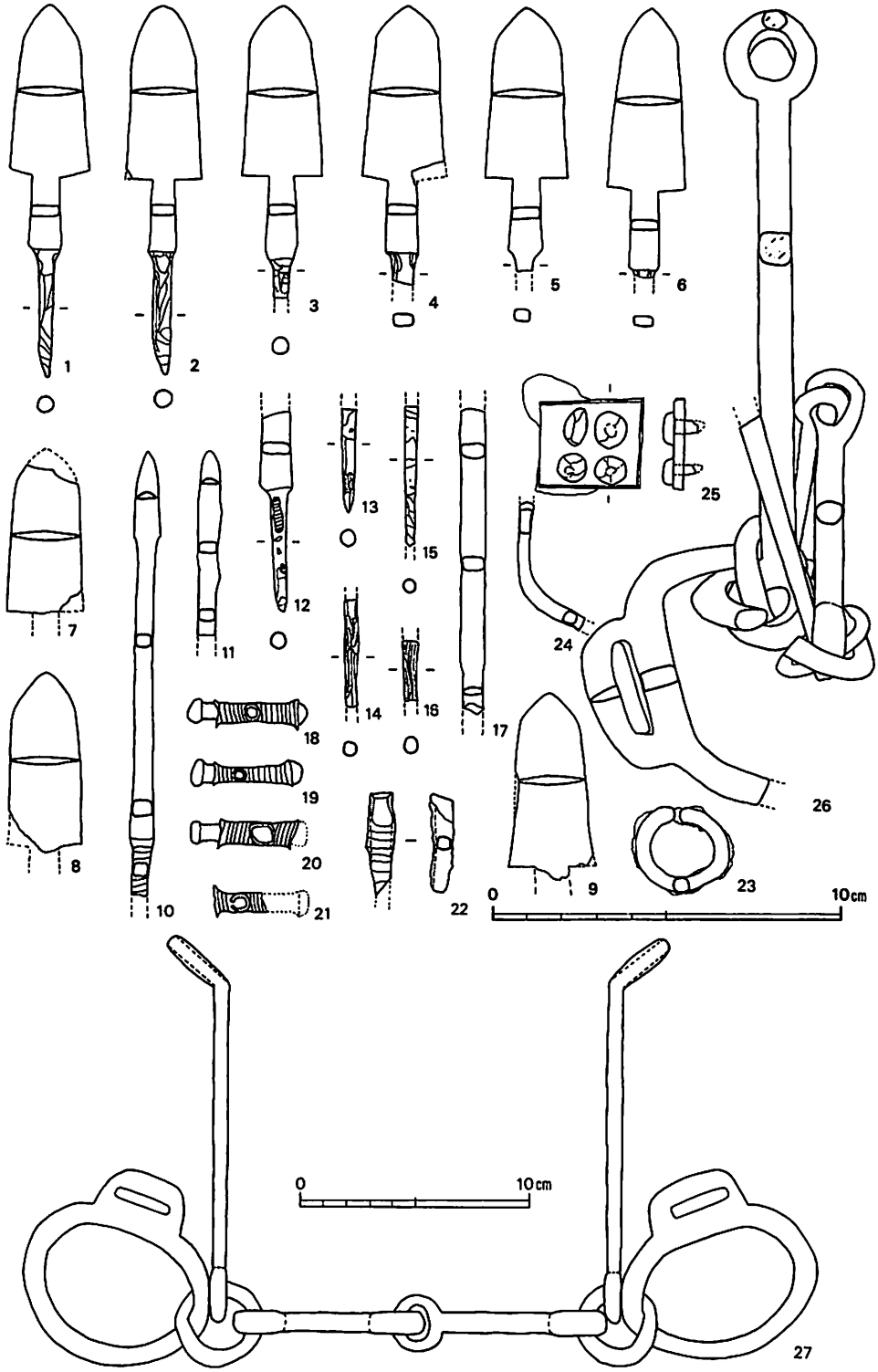
鉄器類　　鉄鏃（第10図１～17）　２種類の形態がみられる。１～９は箆被両丸造圭頭式に属するもので，１・２は全形をほぼ保っていて，全長は11cmほどである。10は片丸造箆被柳葉式に属し，11は関なしのものと思われる。12～17は鏃根の破片。

飾弓金具（第10図18～21）　両頭で，その間は中空になっていて，そこに木質が残る。18は全長3.4cm，木質長2.3（＋α）cm，19は全長3.2cm，木質長2.3（＋α）cm。

釘（第10図22）　棺釘と思われ，頭を除いて木質が残る。

耳環（第10図23）　環径約2.7cmの鉄地銀張りの素環耳飾。

馬具（第10図24～27）　24は馬具に関連するものと思われるが，不明。25は鉸具。26は轡で，錆による融着が著しいが，これから全形を復原すると，27のような復原が可能である。楕円形素環鏡板に搦の環を連結し，この環に引手と銜を連結する構造である。銜は二連で，そのうち１本は両端の環が直角をなす。



第10図　玄室出土遺物実測図(2)

(3)羨道出土遺物(第11図，図版第８・９)

須恵器　蓋杯(第11図１～12)　形態的に２種類がみられ，１～８は蓋・身ともに全体に丸味のある形態で，９～12は全体に扁平な形態である。なお，１～４は灰白色瓦質の焼きである。丸味のある類の蓋は口径13.4～13.8cm，器高4.2～5.0cmで，口縁端部を丸く処理し，外面には段や沈線は認められず，内面にも沈線を廻らすものはない。天井部中央以上はヘラ削り。それの身は口径12.6～13.0cm，器高4.2～4.9cmで，底部ヘラ削り。扁平な類の蓋は口径14.6～14.7cm，器高3.8～3.9cmで，丸味のある類のものより口径が１cmほど大きく，これらも口縁端部を丸く処理している。それの身は口径13.9～14.0cm，器高3.8～3.9cmで，蓋と同じく丸味のある類のものより口径が約１cmほど大きい。

脚付短頸壺(第11図13・14)　蓋は口径11.2cmで，口縁端部内面に１条の沈線を廻らし，宝珠形のかなり大きなつまみが付く。身は口径8.4cm，器高18.0cmで，暗灰白色瓦質の焼き。体部はやや扁平で，口縁部は直立する。底部は粗いヘラ削りが施されている。脚には細長方形透孔３個があけられているが，貫通していないものもあり，雑なあけ方となっている。透孔下に１条の沈線を廻らす。

脚付長頸壺(第11図15～17)　15・16は小形のもので，黝黒色を呈する。蓋は直径9.3cm，器高2.5cmで，口縁部周辺が厚い。身は口径9.5cm，器高19.1cmで，ラッパ状に開く口頸部にやや扁平な体部が付く。体部下半にカキ目が認められ，肩部に『／』状のヘラ記号がある。17は口径11.0cm，器高28.5cmの大形のもので，身は灰色，脚は灰白色を呈し，瓦質の焼き。口縁部外面にカキ目が認められ，また体部の沈線以下より底部までカキ目が認められるが，その中央部はヘラ削りにより一部消されている。脚には細長方形透孔３個があけられている。

短頸壺(第11図18)　口径9.3cm，器高11.9cmで短く外反する口縁部に１条の凸帯を廻らす。体部下半はヘラ削りで，やや焼成があまい。

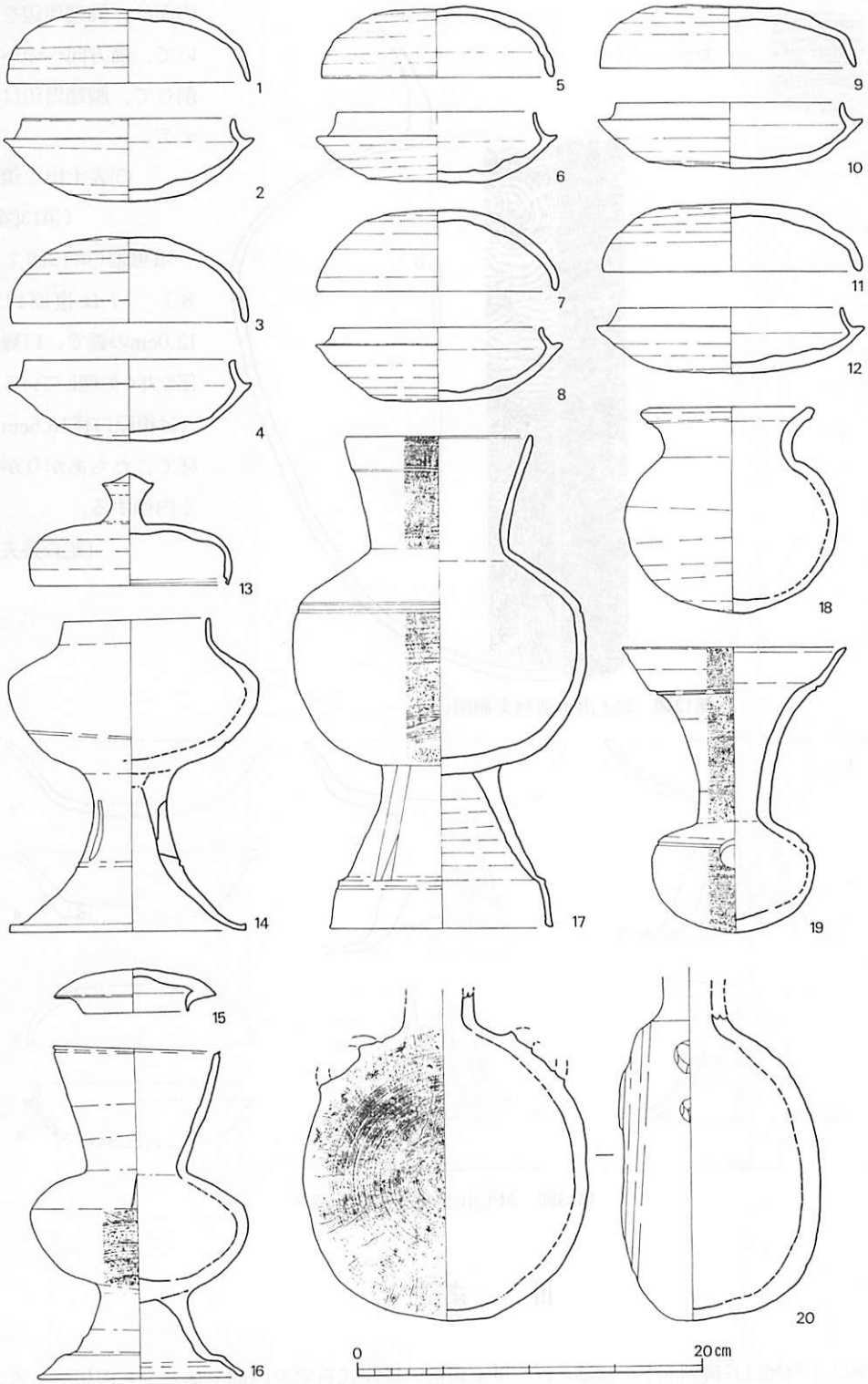
甕(第11図19)　口径12.9cm，器高16.6cmで，口縁部はゆるやかな段になり，外面に波状文を廻らす。頸部にはカキ目が認められる。体部には１条の沈線を廻らし，それ以下底部までカキ目が認められるが，上方はナデにより一部消される。緑色の自然釉を一部かぶる。

提瓶(第11図20)　口頸部・把手が欠失。体部最大径16.5cmで，体部は全面にカキ目が認められる。黒色の自然釉を一部かぶる。

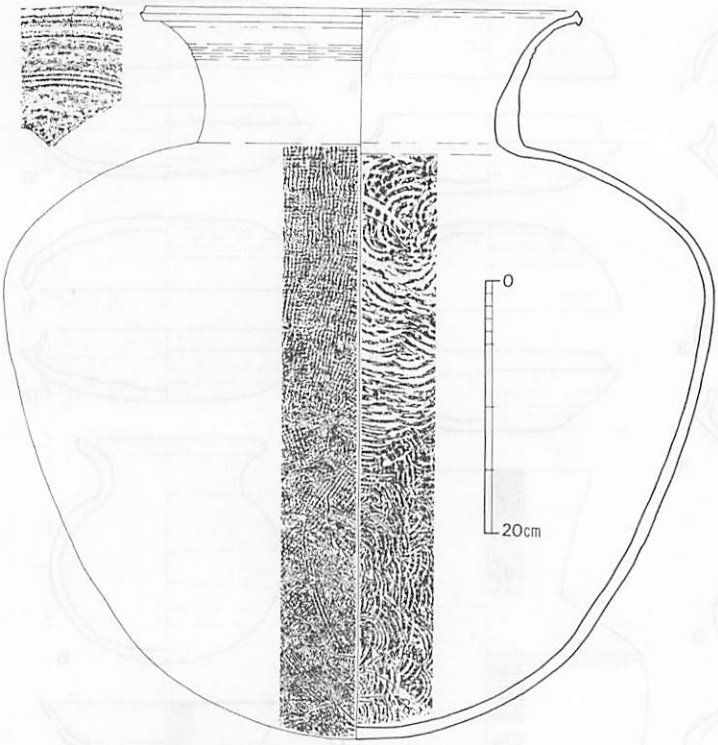
(4)封土出土遺物(第12・13図，図版第10)

須恵器　甕(第12図)　口径34.0cm，器高58.6cmで，外面肩部灰色，底部小豆色で，内面小豆色を呈する大甕であり，底部には焼台にのせた時の凹みが３個認められる。頸部に３本の沈線を廻らし，その上に波状文を廻らす。体部は外面格子目叩きで，内面は青海波であるが，下段の方は細かな青海波となっている。

土師器　高杯(第13図１～６)　６点ともほぼ似た形態である。１は口径15.4cm，器高12.4cm，２は口径15.1cm，器高11.8cmである。これらは身が底部から屈曲してたちあがり外反していく。底部はヘラ削り。脚は外面が縦方向のヘラ削りで，脚端付近に指押え痕が残る。脚



第11図　羨道出土遺物実測図



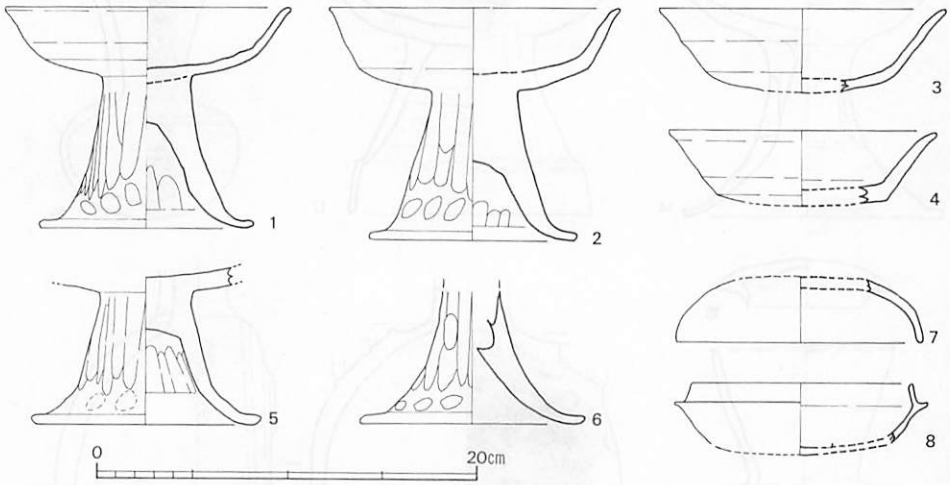
第12図　封土出土遺物実測図（１）

内面は，脚端周辺を除いて，横方向へのヘラ削りで，脚端周辺は横ナデ。

⑸表土出土遺物（第13図）

須恵器（第13図７・８）　７は復原口径13.0cmの蓋で，口縁端部を丸く処理している。８は復原口径16.6cmの杯で，たちあがりが短く内傾する。

（定森秀夫）



第13図　封土出土遺物実測図（２）

Ⅲ．まとめ

重留Ａ１号墳は丘陵斜面上に構築された単室両袖の横穴式石室を内部主体とする円墳である。本墳は２回の埋葬が行われていて，玄室内に“とりまとめ”られた須恵器・鉄器類は初葬の

際のもので，羨道出土須恵器は追葬の際のものと考えられる。まず玄室埋土出土の杯蓋をみると，外面に明瞭な段が認められない。小田富士雄氏は，中尾谷窯跡群の報告書の中でⅢ期の須恵器を検討して，杯蓋の外面に段のあるものをa類，1条の沈線を廻らすものをb類とし，ⅢB期にはa類が消滅するとされている[7]。玄室埋土杯蓋にはこのa類が認められないので，これらはⅢB期に属するものと考えられる。次に追葬の羨道出土杯蓋をみると，玄室埋土杯蓋にみられた古式の特徴がさらに消え，口縁端部が丸く処理され，内外面に沈線を廻らすものもない。一方，小形化等Ⅳ期の特徴もまだ認められない。この羨道出土の杯蓋もまたⅢB期の中に含まれるものと考えられる。したがって，玄室・羨道出土須恵器は大きくⅢB期でとらえられ，その中の時間差と考えられる。ⅢB期の実年代は6世紀後半とされていることから，追葬はさほど隔たることなく行われたとみて，築造時期及び使用期間は6世紀後半代ととらえることができよう。

須恵器以外の遺物では，まず箆被両丸造圭頭式鉄鏃が多いことが注意される[8]。この形態の鉄鏃は福岡県内でも出土例の少ないものである。また，原位置にはなかったが，飾弓金具[9]も出土している。馬具のうち轡は搦の環で鏡板・銜・引手を連結する構造で，山ノ井清人氏によると，この種の類例は9例あり，九州では福岡県脇田山古墳・山の前第2号墳・日拝塚古墳，熊本県横山古墳から出土している。また，氏はこの種の轡の初現は6世紀後半で，この祖形は朝鮮半島からの渡来によるものと考えられている[10]。

次に石室の築造企画についてであるが，晋後尺(1尺＝25cmとする)と高麗尺(1尺＝35cm)で方眼操作を行ってみると，玄室長・玄室幅・羨道長(袖石前端から平面プランにみられる最後部の石まで)・羨道幅が晋後尺ではそれぞれ約8尺・9尺・10尺・3尺，高麗尺ではそれぞれ約6尺・6尺・7尺・2尺となり，どちらの尺にものってくる。本墳は晋後尺から高麗尺への転換期と言われる6世紀後半代[11]に築造されているので，どちらの尺を用いたのかの断定は難しいと思われる。しかし，羨道長のうち袖石は玄室を画するものとしてその長さを減ずると，玄室長・玄室幅・羨道長は約6尺・6尺・6尺となり，1：1：1の比を示し，羨道幅はその⅓という企画性が読みとれる。もしこのような企画が意識されていたとすれば，むしろ高麗尺使用の可能性が高いと言えるかもしれない[12]。

最後に，本古墳群には確認されているだけで20数基の古墳がまだ残っており，宅地開発の前に破壊を余儀なくされている。重留古墳群の全体的な性格は現状では把握し難いが，C1号墳とともに今回の調査がその究明のための一助となることを期待する次第である。(定森秀夫)

註

1）福岡市教育委員会『重留C群第1号墳』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第97集，福岡，昭和58年)。

2）福岡市教育委員会『四箇周辺遺跡調査報告書（1）・（2）・（4）・（5）』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第42・47・63・100集，福岡，昭和52・53・56・58年)。

3）福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅰ』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第89集，福岡，昭和57年)。

4）福岡市教育委員会『影塚第1号墳発掘調査報告』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第21集，福岡，昭和47年)。

5）倉瀬戸古墳群調査団『駄ケ原古墳群』(『倉瀬戸古墳群』所収，福岡，昭和48年)。

6）大牟田市教育委員会『望谷古墳』(大牟田，昭和48年)に若干の指摘をみる。

また，森岡秀人『追葬と棺体配置一後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二，三の考察一』(『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念 考古学論叢』所収，吹田，昭和58年)では，"片付け"という用語を用い，世代交替における埋葬儀礼・絶縁儀礼の一つとされている。

7）小田富士雄『中尾谷窯跡群』(『八女古窯跡群調査報告Ⅱ』，八女，昭和45年)。

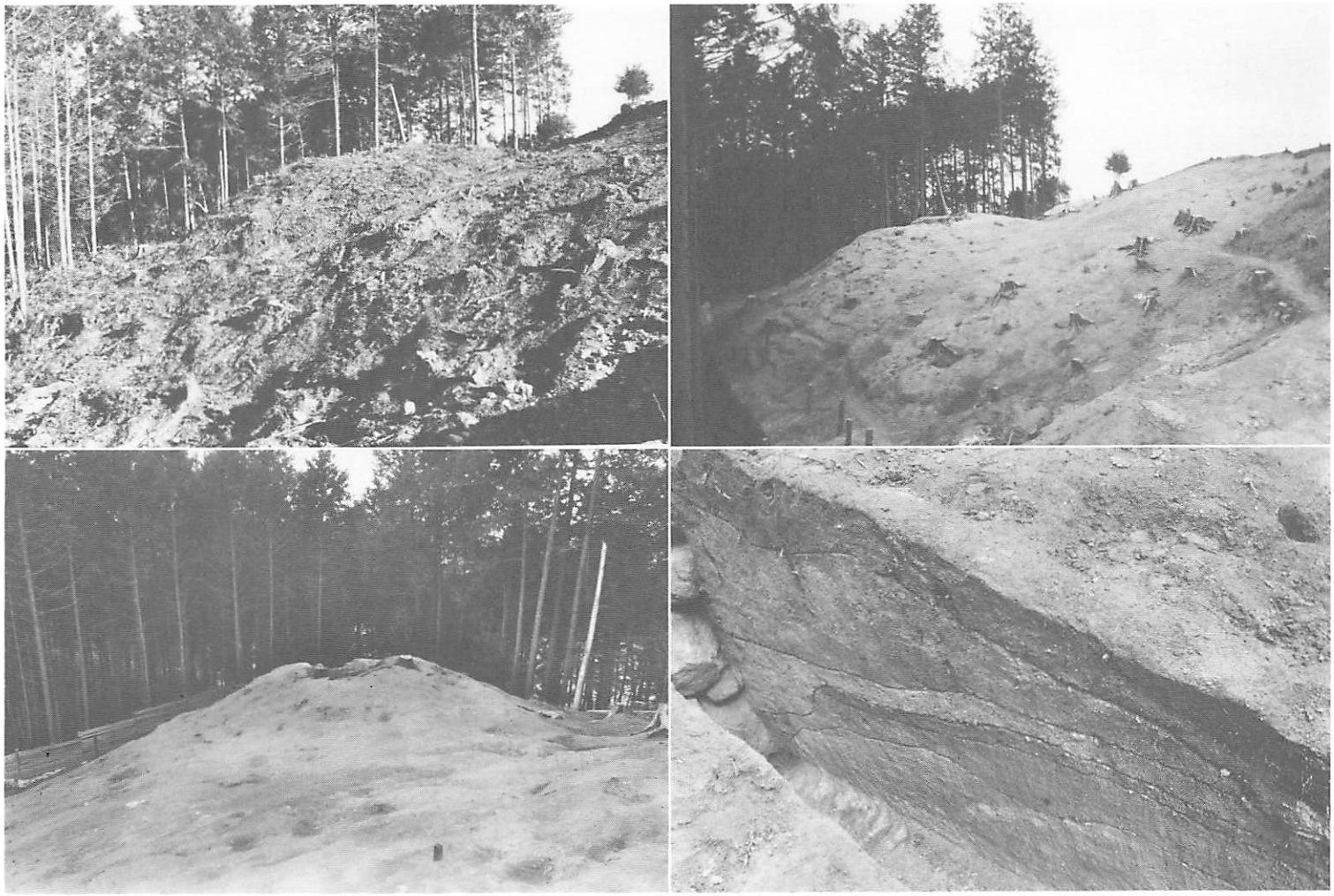
8）南ケ浦3号墳(福岡県教育委員会『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第1集〔福岡，昭和54年〕)，萩原古墳(福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅵ)』〔福岡，昭和50年〕)などから出土しているが，本墳のように9(＋α)本も出土した例はないようである。

9）従来，両頭金具などと呼ばれてきたもので，飾弓金具としてその機能を指摘した論文として，馬目順一『中田装飾横穴出土の鉄製両頭金具の本来的形態』(『平地学同好会会報』特別号掲載，いわき，昭和54年)，田中新史『古墳出土の飾り弓一鋲飾りの弓の出現と展開一』(『伊知波良』1掲載，市原，昭和54年)があり，田中氏の呼称に従った。

10）山ノ井清人『環状鏡板付轡の編年と系譜一特に五箇古墳・小野巣根4号墳の位置付けを目的として一』(『唐沢考古』第2号掲載，宇都宮，昭和57年)。同種の轡は観音山1号墳(那珂川町教育委員会『観音山古墳群』(『那珂川町文化財調査報告書』第8集，那珂川，昭和57年))，宮ノ上第5号横穴(稲築町教育委員会『稲築公園内遺跡』〔『稲築町教育委員会調査報告』第1集，稲築，昭和50年〕)からも出土している。

11）福岡市教育委員会『相原古墳群』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第28集，福岡，昭和49年)で，柳沢一男氏が指摘されている。

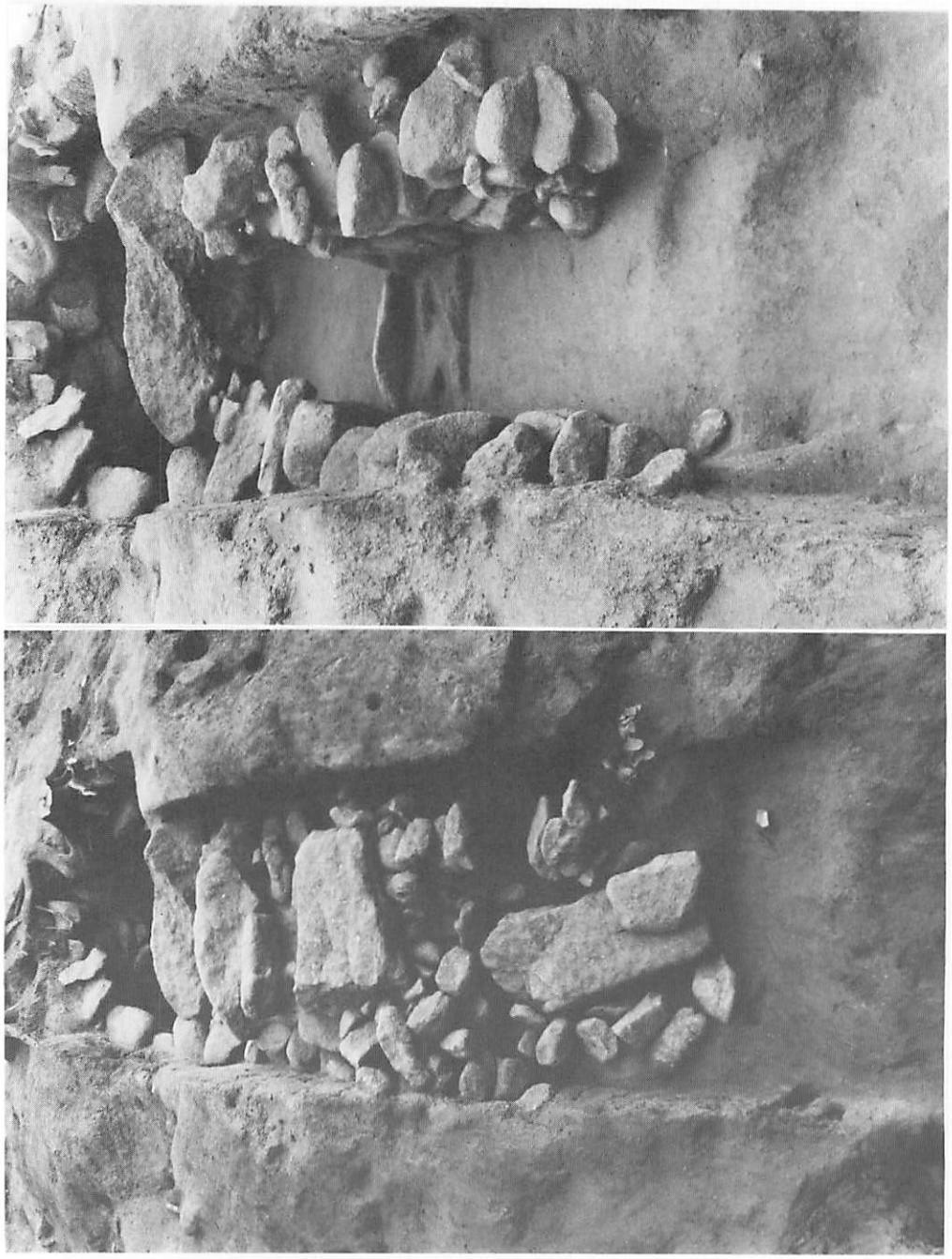
12）橋本万平『計測の文化史』(東京，昭和57年)では，高麗尺の存在は現在のところ明確な結論を出し得ないとされている(80～84頁)。



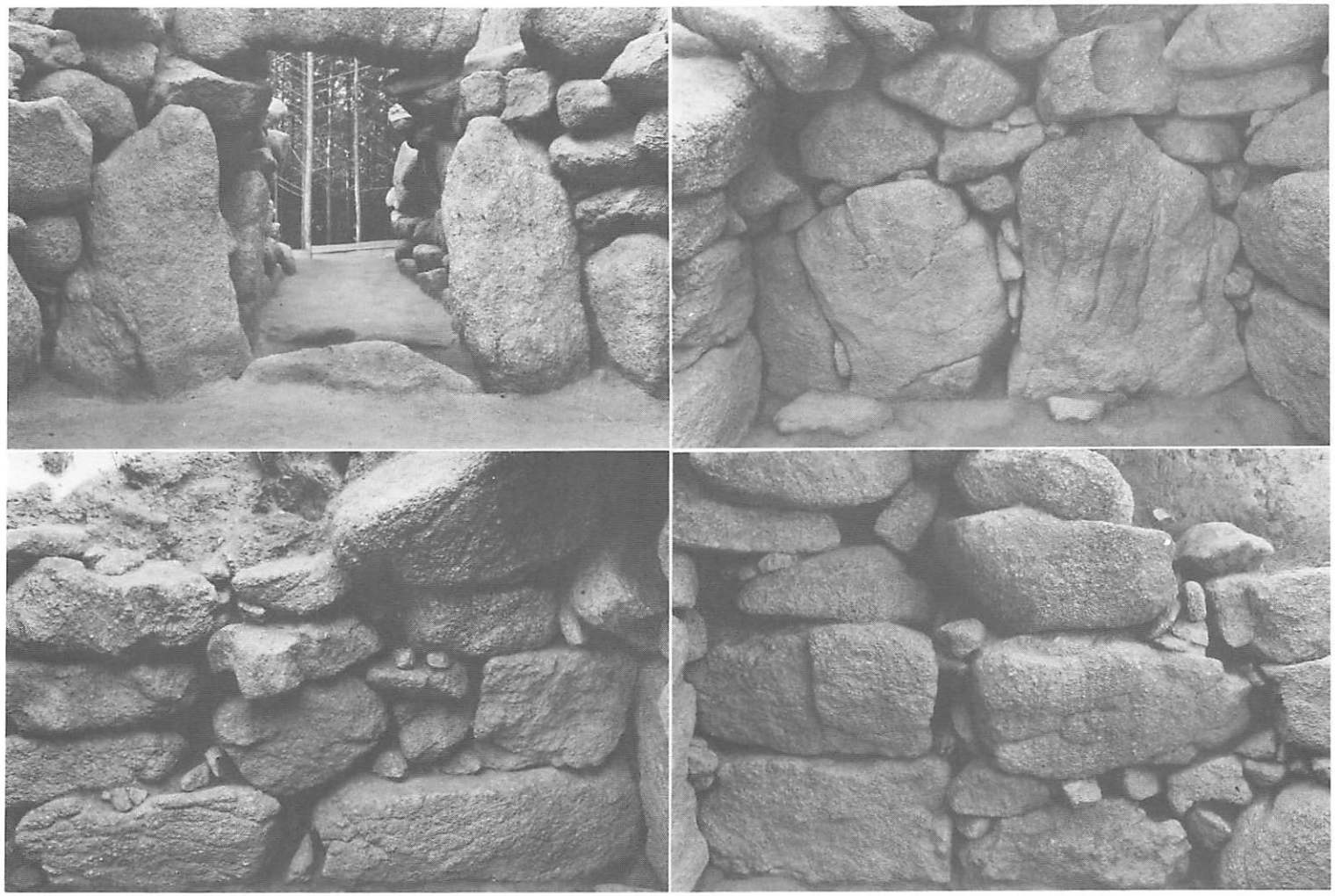
図版第1

墳　丘　上左：調査前全景(南より)，上右：調査後全景(南より)，
下左：調査後全景(東より)，下右：墳丘断面(Sトレンチ)

図版第 2

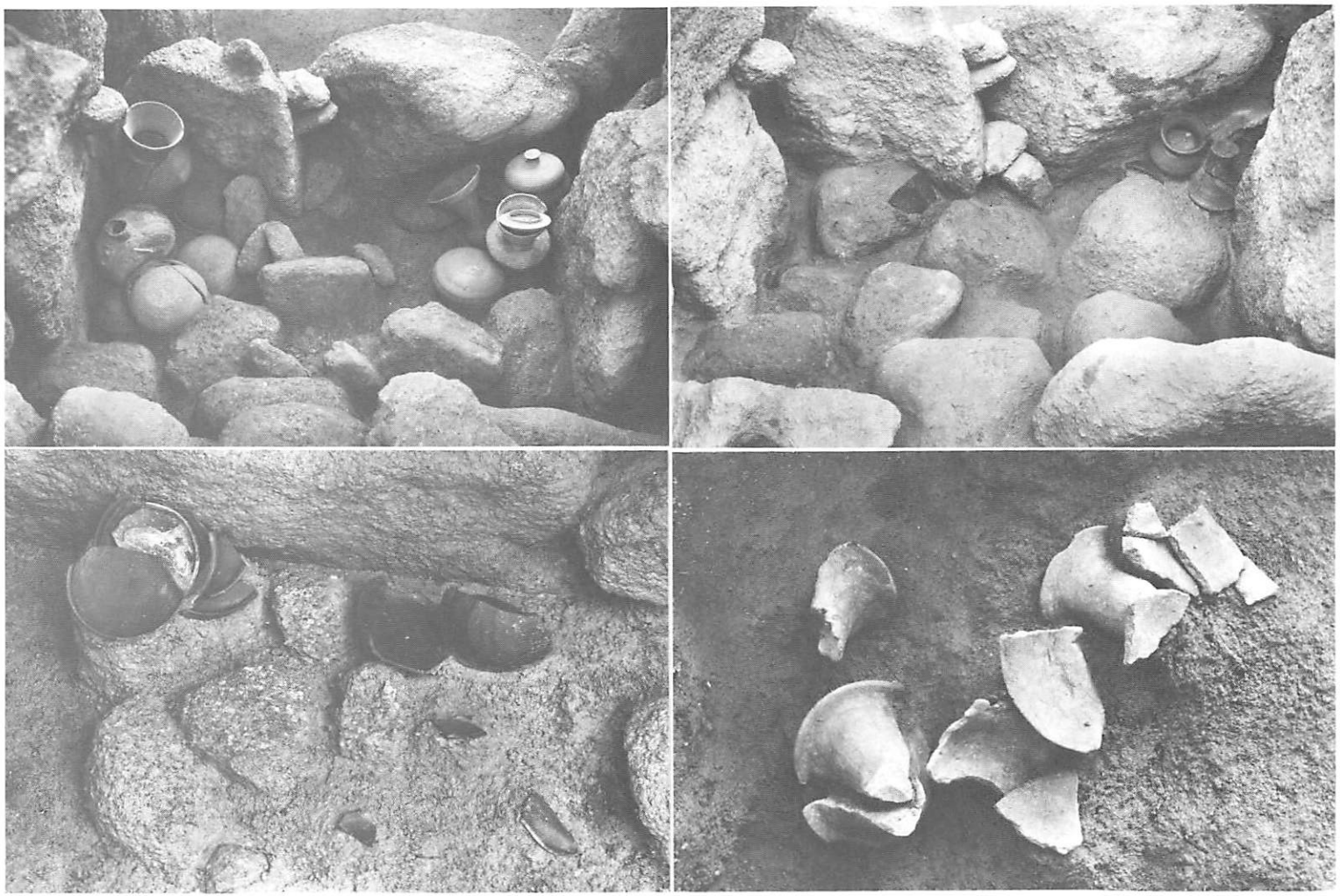


横穴式石室　左：羨道天井石崩落状況，右：調査後全景



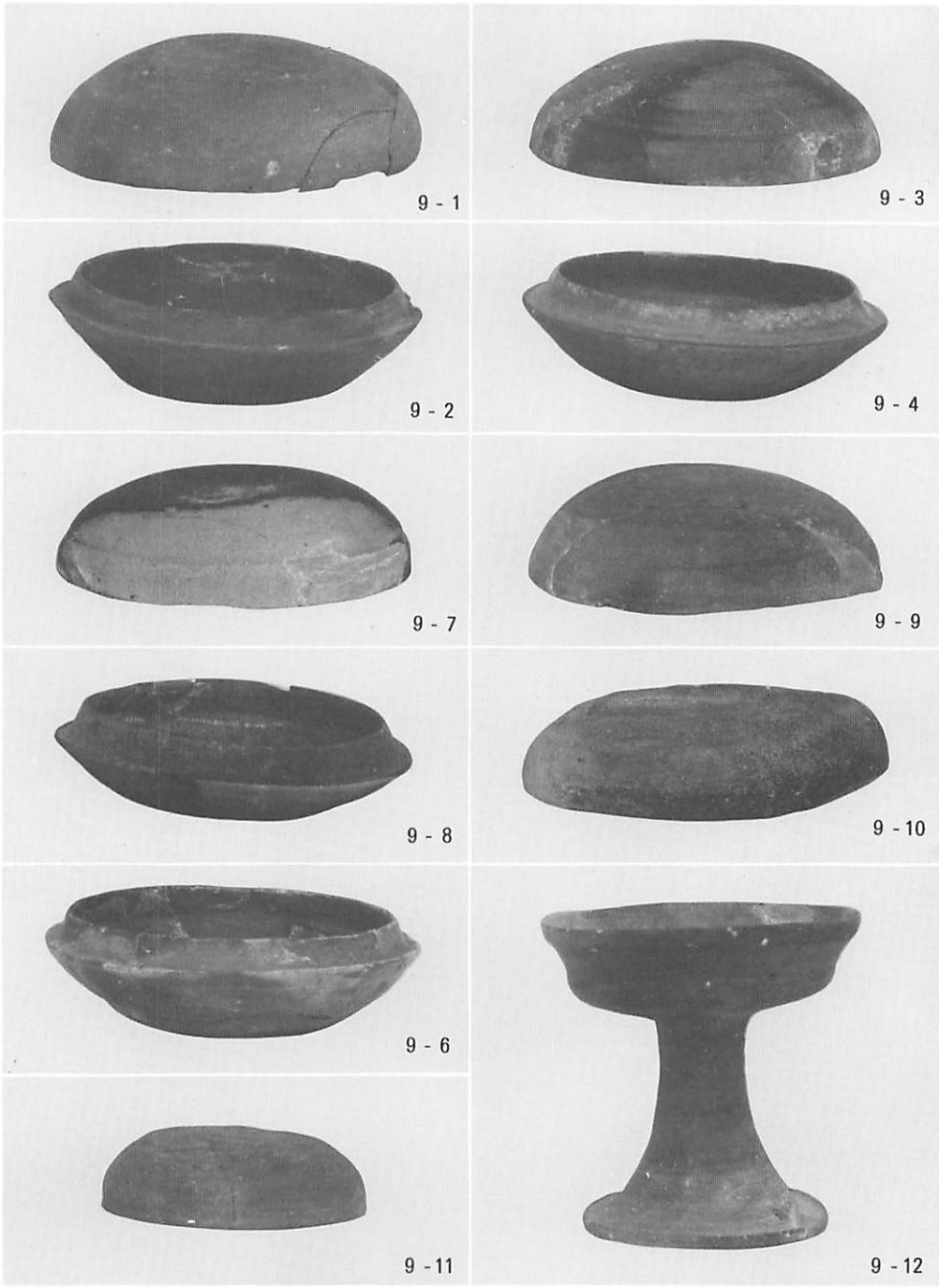
玄　室　上左：玄門，上右：奥壁，下左：左側壁，下右：右側壁

羨　道　上左：左側壁，上右：右側壁，下左：閉塞状況(玄室より)，
下右：閉塞状況(北より)

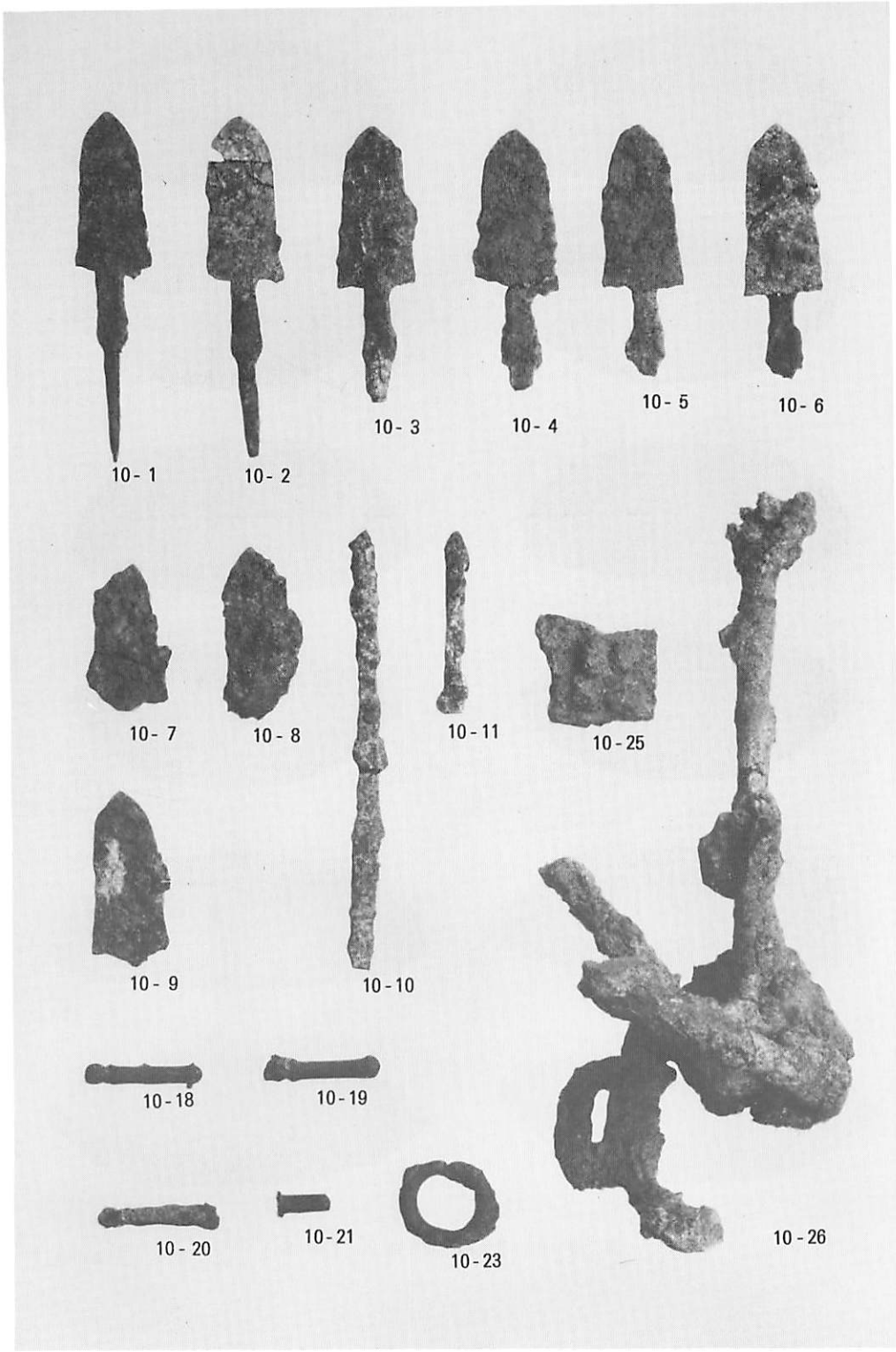


遺物出土状況　上左：羨道遺物出土状況，上右：羨道遺物取り上げ後(写真左上の蓋破片が玄室埋土出土の破片と接合)，
下左：玄室右側壁近く遺物出土状況，下右：墳裾近く封土遺物出土状況(羨道右側)

図版第6

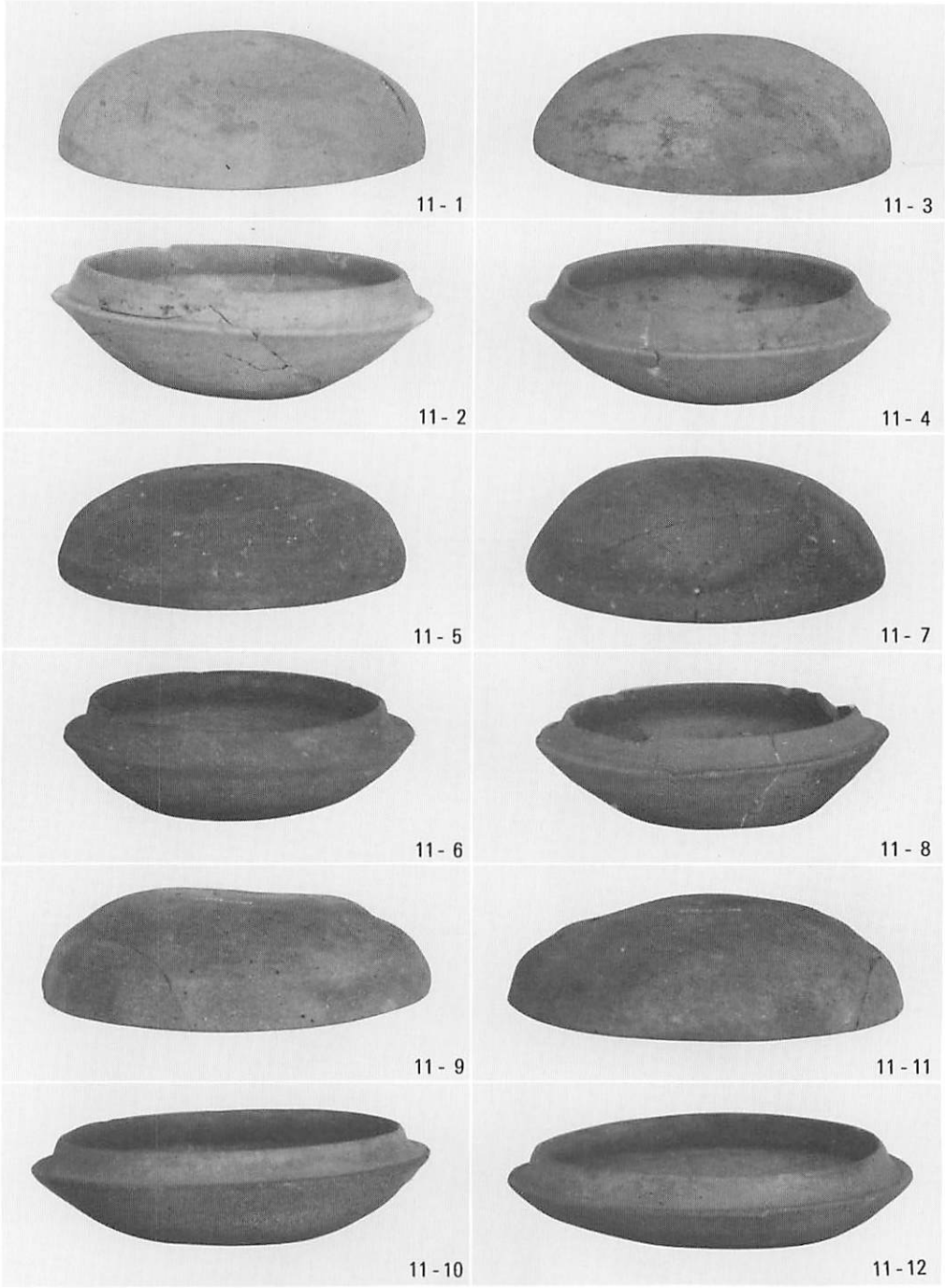


玄室出土遺物(1)(約⅓)

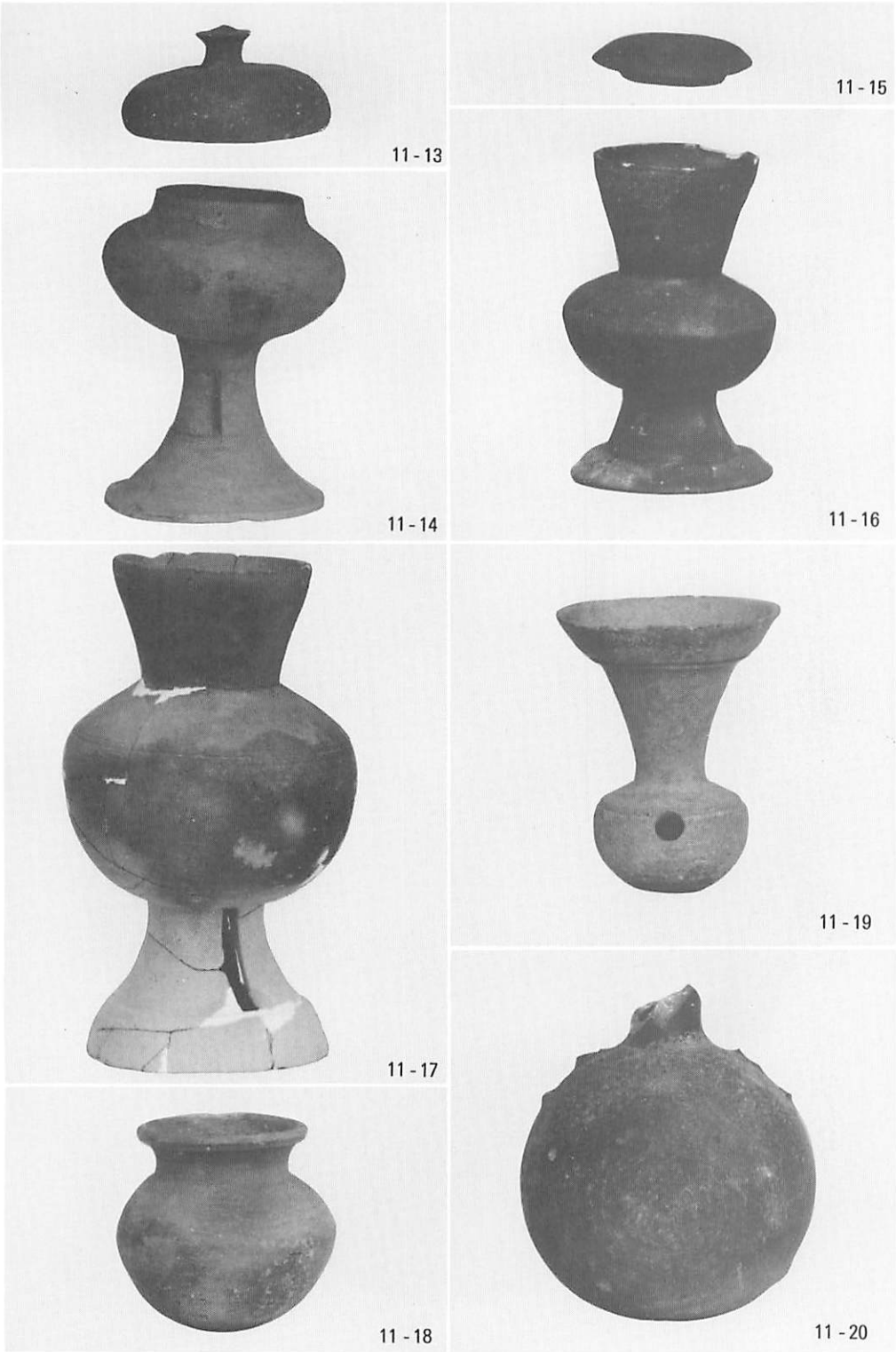

10-1
10-2
10-3
10-4
10-5
10-6
10-7
10-8
10-9
10-10
10-11
10-25
10-18
10-19
10-20
10-21
10-23
10-26

玄室出土遺物(2)(約½)

図版第8



羨道出土遺物(1)(約1/3)



羨 道 出 土 遺 物（２）（約 ¼）

封 土 出 土 遺 物 （上：約⅓，下：約⅕）

福岡市早良区
重留A群第1号墳

発行日　昭和59年3月31日
編　集　平安博物館考古学第3研究室
下條信行・定森秀夫
発　行　財團法人 古代学協會
604 京都市中京区三条高倉
TEL.075(222)0888
振替京都8−850番
制　作　ビクトリー社
604 京都市中京区油小路通錦上ル
TEL.075(221)1420